

観劇のマナー

—— 拍手編 ——

出雲 あきら

1. はじめに

素晴らしい演技が舞台上で繰り広げられているのに、まわりの観客のマナーが気になって集中できなかつたことはありませんか。どんなに見事なパフォーマンスでもその感動は半減してしまいます。本稿では、観劇のマナー、特に拍手について述べたいと思います。

2. 劇中の拍手

ミュージカルでは、公演の途中でも歌やダンスが終わる度に拍手が起こることがあります。何事にも控え目なことを良しとする日本人には、どうもこの手の拍手が苦手なようです。もちろん、ブロードウェイ公演のようなレベルの高い歌やダンスになかなか出会えないので拍手がしにくいというのもあるのかもしれませんが、素晴らしい歌やダンスの後は感動したら大きな拍手を送るとよいでしょう。

ブロードウェイでは時に次のシーンにすぐに行けないほど熱狂的な拍手が続く

ことがあります。その間、役者は止まったままになります。しかし、必ずオーケストラの指揮者が抜群の頃合いでタクトを振り、役者が動き出して、次のシーンに移行します。同時に拍手も瞬時に止み、観客は新たな展開に没頭することができるのです。このように鳴りやまない拍手が途中で出る作品というのは、フィナーレの感動もひとしおです。カーテンコールでは観客全員が立ち上がって拍手をし、舞台と客席はまさに一体となります。ブロードウェイでしか味わえない、胸が熱くなる瞬間です。

しかし、日本では演劇鑑賞における熱狂的な拍手の意味をよくわかっていない人達がいるようです。実は最近、私は歌やダンスの最中に観客が必要ない手拍子をするのを体験しました。『RENT』でドラッグクィーンのエンジェルが初めて登場する歌とダンスのシーンと、『エリザベート』第2幕の冒頭でルッキーニがエリザベートの幸せそうな姿はまがい物と歌う「キッチュ」というシーンです。どちらのミュージカルも、熱狂的なファン

がいる人気作品です。作品の隅々まで知り尽くしている、いわば常連の観客が中心となってロックコンサートの様に手拍子をしていたのです。私はこの手拍子に違和感を覚えました。これでは歌が聞き取りづらくなってしまいます。明らかなマナー違反といえるでしょう。海外ではありえません。

私は手拍子をしている人に注意し、なぜ手拍子をするのか聞いてみたことがあります。舞台を盛り上げるため、というのが言い分でした。演じる役者の方々も当然喜んでいであろうという一方的な思い込みです。ミュージカルは時に歌詞のみでストーリーが進んで行くことがあり、歌はとても大切な要素です。静かに聞き、素晴らしければ歌い終わったところで大きな拍手を送るべきです。

3. 終演時の拍手

さて、ミュージカル公演もフィナーレに差し掛かり、幕が閉まろうとしています。まだオーケストラが懸命に演奏を続けているにもかかわらず、日本では幕が閉まりかけると同時に拍手が起きます。これはオペラの公演でも同じことで、最後の一音まで聞き取ろうとするオペラファンが、拍手を始めた人に注意をすることもしばしばです。日本人の多くは幕が閉まりかけるのを見ると、反射的に拍手

をはじめてしまいます。私はこれをどうも歌舞伎の影響であると考えています。歌舞伎では、定式幕が閉まりはじめると同時に拍子木が「カンカンカン……」と鳴り始めるので、観客はまだ幕が完全に閉まっていない状態でも拍手を始めます。むしろ拍子木が拍手を要求するように叩かれ、幕が閉まる間は拍手をする時間として作り上げられるのです。まだ太鼓や三味線などの下座が演奏していても、この拍手は間違っていないのです。しかし、欧米にその習慣はありません。ミュージカルやオペラのような公演は、幕が完全に降りて、オーケストラが最後の音を弾き終わった後、少し余韻を楽しんでから拍手をするべきです。

4. カーテンコール

一度閉まった幕が観客の拍手に応じて再び開くとカーテンコールとなります。最近では日本においてもこのカーテンコールで立ち上がって拍手をする人達を見かけるようになりました。海外では、素晴らしい公演は必ずといっていいほど観客全員が立ち上がって拍手を送ります。様々な授賞式において尊敬する人物が舞台上に登場しただけで立ち上がって拍手を送る光景が見られることからわかるように、欧米ではより称賛に値するものに対しては立ち上がって拍手を送るという習慣が

あります。これに慣れている欧米人は絶妙なタイミングで立ち上がることができるのです。

カーテンコールはアンサンブルの出演者から順々に出てきて挨拶をします。主役に近い出演者は最後の方です。その日に自分を感動させてくれた出演者が登場すると同時に立つのが正しいタイミングのようです。立ち上がって拍手する習慣がない日本人には難しいと思われがちですが、ブロードウェイの客席では、まわりの人達と同じ絶妙のタイミングで立ち上がって拍手をすることは容易です。公演の途中で送られる拍手の大きさや観客の熱狂ぶりで、今日はこの人がカーテンコールで登場した瞬間に全員が立ち上がって拍手を送るだろうとわかるからです。

5. 終わりに

今から23年前、『レ・ミゼラブル』が上演されてから本格的なミュージカルブームが日本ではおきたといわれています。海外でミュージカルを観劇する日本人も年々増えています。しかしながら、このように拍手だけを取り上げても、日本と欧米では観劇のマナーに違いがあることがわかります。もともと、日本人として慣れ親しんできた習慣なので仕方がないと思われるかもしれませんが、オペラもミュージカルも欧米から輸入されたもの

です。それらを観劇する際は、やはり欧米のマナーにあわせるべきです。

*雑誌『BEST STAGE』2010年11月号・12月号に掲載されたものを加筆・修正いたしました

出雲 あきら (いずも あきら)

本名・千野毅彦。演劇評論家。J-WAVE「東京コンシェルジュ」(日 21:00～)で演劇コーナーを担当。トニー賞授賞式に15年出席している唯一の日本人。映画専門大学院大学教授。(株)電通デジタル・ビジネス局次長。